

ドイツ中世都市法の研究

著者	林 毅
号	3
学位授与番号	法第15号
URL	http://hdl.handle.net/10097/14241

林
はやし

毅
たけし

学位の種類 法学博士

学位記番号 法第 15 号

学位授与年月日 昭和 47 年 9 月 27 日

学位授与の要件 学位規則第 5 条第 2 項該当

学位論文題目 ドイツ中世都市法の研究

論文審査委員 (主査)

教授 世良晃志郎

教授 服藤弘司

助教授 小山貞夫

論文内容の要旨

1. 本論文は次の 8 論文から成っている。

第一章 ドイツ中世都市研究の問題点 — 今後の都市法研究のために —

第二章 ケルン都市共同体の成立

第三章 ケルンの新質 — ドイツ私法史上最初の抵当権 —

第四章 ケルンのシュライン帳簿 — ドイツ私法史上最初の不動産登記制度 —

第五章 ヴァイヒビルト Weichbild について — ドイツ中世都市法の一断面 —

第六章 中世都市法の妥当根拠について — W. Ebel の見解をめぐって —

第七章 シュトラスブルク都市法の研究 — 第一・第二・第三都市法について —

第八章 K. クレーシェ「都市法と都市法史」

2. 本論文所収の諸論文は、大別して 3 群に分けることができる。第 1 群(第三、四、七章)は、史料に密着した形でおこなわれた研究であり、第三章は、まず中世都市において新たに成立した諸法制を概観したのち、シュラインスカルテにおける新質の登記例を検討し、そこから新質

の設定、効力、社会的機能を明らかにしたものである。第四章は、売買、抵当権の設定、定期金売買等、合計16の法律行為について、それらがシュライン帳簿の中にどのような形で登記されているかを検討したものである。第七章は、シュトラスブルク史の簡単な概観をおこなったのち、同市の第一(12世紀末)、第二(1214年)、第三都市法(1245/1260年)および1261年の司教と市民との協約を邦訳し、それぞれの都市法ないしは協約の成立事情を明らかにしたものである。

第2群の論文(第二、五、六章)は、ドイツにおける諸学説を批判的に検討することによって、中世都市の実態に迫ろうとしたものである。第二論文では、論文提出者は、まず、彼が高く評価するH・プラーニッツの学説を要約して提示し、この学説に対するF・シュタインバッハおよびE・エンネンの批判を検討し、プラーニッツ理論が、ごく部分的な修正を加えただけで、原理的にはそのまま維持されうることを確め、この理論に依拠しつつ、ケルン都市共同体の成立史を具体的に叙述している。第五章は、K・クレーシェルの見解、すなわちヴァイヒビルトは宣誓共同体の運動によって成立したものではなく、農村的定住に対して領主が自由を付与することによって成立したとする見解を吟味し、この見解はプラーニッツの第二、第三類型の都市についてのみあてはまり、プラーニッツが主としてとりあげた第一類型の都市についてはあてはまらず、したがってプラーニッツの理論を動揺せしめるものではなく、むしろそれを補強するにすぎないものであるとの結論に到達している。第六章は、都市共同体は市民たちの宣誓共同体の結成によって一挙に永続的に成立したものではなく、市民たちの宣誓の更新によってたえず基礎づけ直されなければならなかったとするW・エーベルの主張をとり扱ったものである。論文提出者はこのエーベルの主張を高く評価するものであるが、しかしこれもプラーニッツの理論を深化・発展させるものであり、それを根底から覆しうるものではないと評価している。

第3群に属する論文のうちで、第一章は、中世都市(法)の研究の上で現在とくに問題とされるべき諸論点を網羅的な形で提示し、将来の研究に備えようとしたものであり、第八章は、クレーシェルの論文「都市法と都市法史」の紹介の形で、都市法研究の現代的意義を問おうとしたものである。

論文審査結果の要旨

第一に注目されるのは、本論文が「中世都市」に関して専門法制史家によって書かれた、わが国における最初の著書であるということである。中世都市をめぐる諸問題の中には、専門法制史家の処理にまつべきものも多いのであるから、本論文の功績は大きい。第二に、本論文には中世都市法に関する多くの原史料の邦訳が含まれている。この史料邦訳も、今後の研究にとって大きな価

値をもつはずである。第三に、論文提出者は、「とにかく西洋の研究成果の無批判的な摂取に終始しがちであったわが国の西洋法制史学界のあり方と訣別し、自らの足で立って自らの頭で考えた真の社会科学としての法制史学を構築する」ことを念願しており、第2群の諸論文の執筆にあたっては、この態度を貫徹しようとする真摯な努力が払われている。第四に、論文提出者は、中世都市を封建社会の全構造との関連において把えること、すなわち都市をめぐるさまざまな矛盾対立を分析すべきことを提唱しているが、これはきわめてすぐれた問題視点であり、提出者がさらにこの作業を具体的に展開してくれることを期待したい。以上によって、本論文は、学位論文として十分な価値を有するものと認められる。

以上によって、本学位論文提出者は、法学博士の学位を授与されるに値するものと認める。